

空 觀 序 說

——特に中論を中心として——

藤 原 了 然

(一)

空觀の實踐は極めて直截簡明である。それは恰も雲晴れて月おのづから明かなるを思い出さるものがある。けれども、空觀の論證ということになると、その幅は極めて広い。何故ならば、一代佛教々理の悉くは、空觀に裏づけられ、空觀の論證に終始しているといつていゝほどであるからである。

原始佛典の骨格を形成するものと考へられている縁起の理は、その唱導の經路を訪ねるならば、いわゆる我説の排除であるが、理論的には、外道有見の對治を所期とするも

のであろう。有見とは實在觀ともいわるべきものであるから、佛教の縁起觀は、いわゆる實在觀と峻別さるべき立場にあるものと考へらるべきである。しかして、この有見もしくは實在觀と稱せられるもの虚妄性の内觀が空觀とよばれる。従つて、空觀の表現が、否定的であり、消極的となることは奇とするに足らないところである。

部教數學の全貌を明かにすることは、今日では至難の事に屬するが、それにしても、從來の既成教學の定説の如くされている、犢子部の補特伽羅を附佛法の外道としたり經量部の細意識を無下に異端視するという如きことは必ずしも當を得たものとはいえないであらう。佛教々理の展開と

いう視野に立つならば、これらの所説は、無我説のもつ欠陥を補わんとする涙ぐましい努力であり、やがて大乘教説を産み出す陣痛として理解さるべき理由が見出さるべきである。

印度大乘の成立は、期せずして、空宗と有宗すなわち中觀と瑜伽との兩説を結論とする。兩者相いよつて車の兩輪をなすべき性質のものであるが、その立場の相違は、おのづから時に論諍を産む。但し前者は心を觀じ、後者は法を觀ずるものをいうことが出来るか。

佛教、支那に傳來して、唯識・三論の學派を生じ、更にすゝんで華嚴・天台の教學を樹立することになつたけれども、それは要するところ、建築物の壯觀であつて必ずしも建築法の進歩とのみいうことは出来ない筈である。

思うに、空觀の論理は龍樹に於て最高峰に達し、爾後は、この論理の高原に於ける展開と解さるべき性質のものである。こゝに龍樹が教相的には八宗の祖と仰がれ、思想的には、佛母般若の提唱者としての地位を占めるのは當然のことゝいなければならぬ。佛教思想史の概觀は、明

かに、部派教學の異説亂立は、空觀の大海に注入する百川の流聲を思はしむるものがある。龍樹に到つて、從來の諸思想は、眞に安定の場所を得たものと解さるべきであつて、龍樹の著作の論法のみに着して、破邪の一邊に終始するかの如き理解は、すでにしばしば指摘されているところであるが、決して正しいことゝはいえない筈である。

(二)

しかし、龍樹の破邪顯正は、なんといつても極めて特色あるものといわなければならない。殊に龍樹の壯年時代の作と考えられ、外道と小乘の偏見を破すると共に大乘の實義を明徹にしていると理解されている中觀論の論法は刮目に値するものがある。

たとえば、中觀論の觀四諦品第二十四、第三十偈

無四聖諦故 亦無有法寶

無法寶僧寶 云何有佛寶

abhāvāc ca-āryasatyānāṃ

saddharmo 'pi na vidyate /

dharme cā-asati sa inghe ca

katham buddho bhaviṣyati //

觀涅槃品第二十五

涅槃與世間 無有少分別

世間與涅槃 亦無少分別 (第十九偈)

na sa nisārasya nirvāṇāt

kiṃ cid asti viṣeṣaṇam /

na nirvāṇasya sa nisārāt

kiṃ cid asti viṣeṣaṇaṃ //

dharmo buddhena deṣitāḥ //

涅槃之實際 及與世間際

如是二際者 無毫釐差別 (第二十偈)

nirvāṇasya ca yā koṭiḥ

koṭiḥ Samsārasya ca /

natayor antaraṃ kiṃ cit

susūksmān api vidyate //

(三)

という相違はあるが、その論法を所期に於ては何んら異なる
ところはない。龍樹は更に觀涅槃品の結語として、嘉祥の
見解によるならば、大乘の迷執を破する結語にも當るわけ
であるが

諸法不可說 滅一切戲論

無人亦無處 佛亦無所說 第二十四偈

sarva-upalambha-upagamaṇāḥ

prapañca-upagamaṇāḥ gīvaḥ /

na kva cit kasya cit kageid

dharmo buddhena deṣitāḥ //

と説くに到つては、その所表現たるや、佛説の常規を逸
する感すら見うけられるのである。この疑難に答えるもの
として、中論に於ける二諦の所説と八不の主張が理解さる
べきである。

この三偈の中、前一は四諦を論じ、後二は涅槃を論ずる

嘉祥の大乘玄論や中論の疏には四重の二諦を説いて、龍

樹の二諦説の眞意を明かにしようとしているけれども、これらは要するところ中論觀四諦品第二十四、

諸佛依二諦 爲衆生說法

一以世俗諦 二第一義諦 (第八偈)

dve satye samupāgṛīṭya

buddhānaṃ dharmā-deśanā /

loka-Samvṛīti-Satyam ca

satyaṃ ca paramārthataḥ //

二種の眞理に基いて 諸佛の説法がある

世間通用の眞理と 第一義的の眞理である

若人不能知 分別於二諦

則於深佛法 不知眞實義 (第九偈)

ye' nayoṛ na vijānanti

vibhagaṃ satyayor dṛayoḥ /

te tattvaṃ na vijānanti

gambhīraṃ buddha-gāsane //

此の二の眞理の區別を 了解しないものは

佛説に於ける深き眞實を了解しない

若不依俗諦 不得第一義

不得第一義 則不得涅槃 (第十偈)

vyavahāram anāgṛīṭya

paramārtho na deśyate /

paramārtham anāgamyā

nirvāṇaṃ na adhigamyaṭe //

世俗に基かずしては 第一義は教示せられない

第一義に到らずしては 涅槃は到達せられない

註 梵文和譯は、國譯一切經中觀部一、羽溪了諦博士譯による

の三偈の眞意を四句分別の常套に従つて解明したものに他ならないといえよう。そして、この三偈、特に梵文によつて一層明かに窺われることは、龍樹の説く二諦が、小乗有部で説くが如き二諦説とはその趣を異にして、世俗、第一義の二諦に對する謬なき理解こそ、迷執の破邪であると共に無所得正觀の確立すなわち顯正であることが明かにされているのである。こゝに、中論を所依の論とする三論

學徒によつて、約教の二諦説の行われる所以が見出さるべきである。

(四)

この約教の二諦説の最も直接的な思想的根據として、中論卷頭に掲げられている八不縁起の論が重視さるべきである。

不生亦不滅 不常亦不斷

不一亦不異 不來亦不出

能說是因緣 善滅諸戲論

我稽首禮佛 諸說中第一

anirodham anutpādam

anucchedam aśāśvatam /

anekārtham anānārtham

anāgamiam anirgamam //

yañ pratyā-Samutpādaḥ

prapañca-upagamaḥ nīvam /

deśayāmās Sambuddhas

taṇ vande vadatāṇ varam //

生ずることなく 滅することなく

断ならず 常ならず

一義ならず 異義ならず

來ることなく 去ることなき

安穩に戲論を寂滅せしむる

縁起を説きたまへる正覺者

諸の説者中最勝なる

その人に私は禮する

註 梵文和譯は同前註。

右の中論歸教序とよばれている八不の偈は、羅什譯に於てはその意味が捕捉しがたいものがあるし、中論の異譯とされている波羅頗密多羅譯の般若燈論に於ても、また惟淨の大乗中觀釋論に於ても、西藏譯の無畏論に於ても明快性を缺くものがある。

しかしながら、すでに智度論に於ては不增不淨を加えて

十二不が説かれ、又、空觀を取上げる論書の中に、しばしば八不中道又は百非中道という表現が見うけられることは、八不の破邪はそのまゝ中道の顯正たることを物語つているという大本に於ては謬りのある筈はないと考えられる。

(五)

中道とは對象的に解される場合には、常に、言語道斷心行處滅と説かれてゐる。しかも、かくの如き中道の眞相を了解せしめんがために中論疏は五句をあげ三中を説き、三論玄義は四種の中道をあげているけれども、要は、大乘玄論や二諦章に於ける四種釋義、大乘玄論の三種釋義に於て明かに知られるが如く、個在觀、實在觀の拒否であり、縁起觀の高揚を出でないものといわるべきである。

この意味に於て、般若空觀の展開が眞空妙有を結論とするという見方は正しい。たゞ中論に於ける所論が、妙有的解説に於て缺けているという事實は否みがたいところである。しかしながら、妙有的な所説が中論的な所論と思想

とを裏づけとするものでなければ、それは結局、實我實有の外道説と何んら簡ぶところのないものとなるということ
は深い關心事でなければならぬ。
(未完)